

まちの史跡めぐり

171

町文化財専門委員 石龍 豊美夫

江戸時代のため池について(2)

平成二十二年(二〇一〇)年三月、農林水産省が全国約21万か所のため池から100を選定した「ため池百選」を発表しました。九州では佐賀県・長崎県・熊本県が各2か所、大分県・宮崎県・鹿児島県および福岡県が各1か所でした。沖縄県も2か所選ばれています。

福岡県の1か所はみやま市の「蒲池山ため池」(旧柳河藩領)

です。筑前(旧福岡藩・秋月藩領)からは一つも選ばれませんでした。が、そもそも候補に手をあげたのかどうかわかりません。

香川県からは5か所が選ばれ、日本最大として知られる満濃池(周囲約20キロ)がその中に含まれています。満濃池の創始は大正年間の七〇〜四四年頃とされ、洪水で決壊した後、弘仁十二(八二二)年弘法大師空海が責任者となって復旧に当たりました。「アーチ型堤防など当時の最新工法を駆使し工事を成功に導いた。」とされています(ウイキペディア)。

日本最古の用水路として知られるのが那珂川町の「裂田の溝」です。農林水産省が平成十八(二〇〇六)年に選定した「疎水百選」に選ばれています。この時は九州・沖縄から16か所が入り、福岡県からは他に大石用水(ウイキペディア)。

(うきは市など)・堀川用水(朝倉市)・「柳川の堀割」が選ばれました。堀川用水は朝倉三連水車で知られているところです。「裂田の溝」は奈良時代の歴史書『日本書紀』に記録されています。同書によると、大岩が溝を掘削する障害となっていたところ、雷が落ちて大岩が裂け、工事を無事に終えることができたとされています。裂田神社も祀られています。

伝説が正しいかどうかとは関係なく、『日本書紀』に書かれたことで、「裂田の溝」は遅くとも奈良時代から現代に至るまで、

しを、博多の富商立石久明(又左衛門、号静一)戸原の産なるを以て、餘多の金を出して、かの岩を掘り抜き水を通せしより、用水餘りありて、あたり近き七つの池々まで行及び、五百餘町その利を蒙れり。されば公(黒田の殿様)より其功を賞し給ひて、数々の御褒賜を下し給ひぬ。久明の孫又六も久明の志をつぎ、その水引ける溝を代々修理せんことを願ひ出しかば、格式をすゝめ給ひける。如斯大成功を末代まで伝えて、村々の民どもをして長くその徳を忘れざらしめむがために、そのあら増を識しおくものにむ。

安政四年丁巳四月建「長卯平翁表徳碑」も『福岡県碑誌 筑前之部』が収録していますが、もとは漢文で、その書き下し文もあわせて掲載しています。以下はその要点を取ったものです。

「筑前粕屋郡戸原・江辻・大隈の各村は地勢が平らで水に乏しかった。古来(古)土手、転じてここではため池のこと)を設けて水を貯め灌漑に供してきた。しかし一旦干魃(かんぱつ)にあえは涸渴(こかつ)し

農業には大なる損害を与える恐れがあった。戸原村の大庄屋長卯平はその対策として若杉山の渓流を水源として導くことを計画した。しかし中途に巨岩があり、これを掘り抜かないと水を通すことができない。その費用は莫大なものであった。そこで戸原村の出身で、博多の豪商立石又左衛門に相談した。

又左衛門が費用を負担する約束をしたので、卯平自ら監督してついに隧道(長さ五〇余間(約90メートル)のトンネル)を掘り抜くことができた。前後の溝(水路)は二〇〇〇余間(約3・6キロ)に及んだ。これによって新大間池に若杉山の水を通すことができた。

文化十二(一八一五)年に起工し七星霜(七年)を費やして竣工した。その費用幾万金(数万両)は皆又左衛門が負担した。以後新大間池は涸れたことがない。新大間池からはさらに駕輿町(駕与丁)池など数か所に流れ、一三か町村、一〇〇〇余町歩の田を潤している。藩侯(藩主)はこれを表彰して米を支給し、大

庄屋をやめてからも大庄屋格の格式で優遇した。この記念碑は水利組合が建設して感謝の意を表すものである。」

同書には「立石久明墓誌」も収録しているので参照しておきます。墓は福岡市博多区中呉服町、正定寺(浄土宗)にあるとのこと。以下は要点。

「姓は立石、名は久明、又兵衛と称し(又左衛門でないことに注意が必要)、後に静一と号す。粕屋郡戸原村高木氏の出で、立石家に娘婿に入つて後を継いだ。文政辛巳の年文政四(一八二二)年、年行司(大庄屋)に匹敵する博多の町役人となった。その子は松居姓を名乗った。安政丙辰の年(安政三(一八五六)年)官はその功績(隧道掘削に資金を出したこと)を賞し毎年米二俵を支給することとし、あわせてその功績を記録した碑を竇口(隧道の入り口の意)に建てた。文久壬戌の年(文久二(一八六二)年)に死去。年齢は八十五歳。」

この竇口の碑が前掲の「新大間堤碑」に該当するようです。「官」とあるので、同碑は藩また

一三〇〇年以上にわたって連続して続いていたことがわかるのです。

県道35号線(筑紫野古賀線)主要地方道は渋滞解消のための4車線化と、門松交差点を迂回するバイパスの立体化工事が進められています。バイパスは一部で新大間池を南西側から北東側へとまたぐ橋となります(写真1)。

この橋の須恵町側の起点と門松交差点の間(県道35号線の東側)新大間池の土手際に石碑が並んでいます(写真2)。左端から順に「新大間池整備事業竣工記念碑」(平成九年、粕屋町建立)、「導水路記念碑」(昭和十二年、大川村(現在の粕屋町の一部)外三ヶ町村土木組

合)、「新大間堤碑」(安政四(一八五七)年)、「長卯平翁表徳碑」(建設年不詳)です。

「新大間堤碑」(写真3)の碑文は『福岡県碑誌 筑前之部』(昭和四年)に収録されていますので、そこから引用しておきましょう(ただし、句読点・濁点などを補っています)。新大間池は須恵町と粕屋町にまたがっています。

「新大間堤碑」表糟屋郡の内、大隈・江辻・戸原・内橋の四村(いずれも現在は粕屋町の内)、毎歳旱災(日照り)水不足の災害ありしが故、此大間の池を掘りたりしに、水勢なかりしかば、文化の頃(一八〇四〜一八)若杉の谷水を引き掛けんと、村長(庄屋のこと)ども思起せしに、大なる岩ありて、そのこと成難かり

は郡奉行が資金を出して建てたことがわかります。



写真3

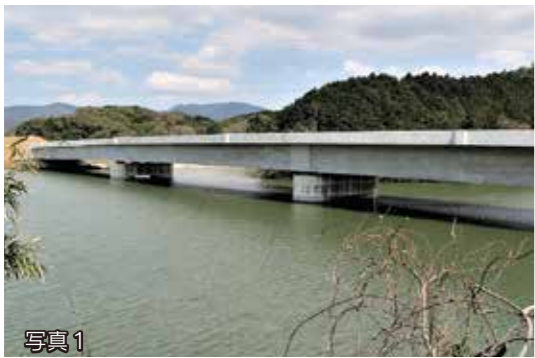


写真1



写真2